

グルー＝ナーナクの実践論 —修行階梯説について—

橋 本 泰 元

はじめに

本紀要第56号に拙稿「グルー＝ナーナクの実践論」を掲載したが、本稿はスィク教団内でその最終段階と解釈されている修道論を、さらに原典『グルー・グラント・サーヒブ』(GS)に探っていく試みで、前稿の補完をなすものである。

1. 階梯の上昇

永遠に拡大する「畏怖の念」と「心」の進行する帰依の念とともに、歓喜と寂靜の感覚が進展するのである。これが、前進し向上する道程である。この上昇が理解と経験へのより高い、もっと高い段階への力強い上昇であり、グルー＝ナーナクの教えの有名な「五つの階梯」¹である。

この教えに組み込まれたパターンは、グルー＝ナーナクの思想に対するスーフィーの貢献を表していると言われることがある。その理論の源は、スーフィーのマカーマート(maqāmāt「階梯」)に見つけられるものである。しかしながら、この関連を確証するいかなる証拠もなく、対応関係も実際には近くない。より近い対応関係は、『ヨーガ・ヴァーシシュタ』(*Yoga-Vāsiṣṭha*) 所説の救済論のパターンに見いださう²。スィク教徒の注釈者たちは、この「五つの階梯」に対して、もちろん相当な重要性を与えている。これが「心」の究極点への上昇を明らかに表そうとしているからである。しかしながら、グルー＝ナーナクの説明に不明な点も多く、注釈者たちもさまざまな考え方を示しているのである。

「ダラム・カンド」(Dharama Khaṇḍa) が第一の階梯で、五つのうちで最も明確である³。「ダラム」は、ここでは因果の法を表している。この言葉は明らかに現象世界に当てはまり、この最初の階梯に達した人間が、この言葉が宗教的・倫理的意味にも当てはまること

1 「階梯」の原語は khaṇḍa であり、精神的進展の世界あるいは段階を意味する。Japujī 34-37 (GS, pp. 7-8)

2 Dasgupta, S. (1932), *A History of Indian Philosophy*, Vol. 2, p. 264 が *Yoga-Vāsiṣṭha* VI, 120 所説の7階梯を提示している。Cf. Wāsudev Laxman Śāstrī Paṇṣīkar ed. (1937), *The Yogavāsiṣṭha of Vālmīki*, Part.2, Bombay: Nirṇaya-sāgar Press. p.1043.

3 Japujī 34 (GS, p. 7). また dharama < Skt. dharma である。

を認識するのである。神は正しく、神の宮殿では真偽が明かされるのである。

「ギヤーン・カンド」(Giāna Khaṇḍa) が第二の階梯である⁴。この階梯は、明らかに個人の理解の明確な拡大を示しており、それは、おもに世界の多重の属性と偉大な先人たちの重要性をどんどん認識していくことによるのである。この重要性ははっきりとは述べられていないが、注釈者によればその重要な点は、このような理解が個我の自己本位の観念を弱めてくれることである⁵。明確に述べられている一つの特徴は、この階梯の結果として生じる歓喜である。

智慧の階梯で智慧が輝く。そこには、悦びの音、歓喜の祭礼 [がある]。⁶

第三の階梯である「サラム・カンド」(Sarama Khaṇḍa)⁷ は最も不明瞭で、注釈者たちはさまざまな見解を示している。「サラム」という言葉の意味に関して、三種類の意見がある。第一は、この語の原語を Skt.śrama に求めて、「努力の階梯」と解釈するものである⁸。第二は、Skt.śarman の派生語と解釈し、「幸福の階梯」とする⁹。第三は、ペルシア語の śaram (恥) 語源説を主張し「謙遜の階梯」あるいは「(自己の) 信託の階梯」と解釈する¹⁰。ジャプジーの実際の記述は、回答を与えていないが、この段階までいたると、その宗教的経験は表現を超えていることをむしろ示唆しているといえる。

そこで創られできたものは、とても比類なきもの。

それらは口では言い表せない。話そうとすれば後で後悔する。¹¹

次の二行でヒントのみ与えられる。

そこで直観知、知識、心 [作用] の理解が創られる。

そこで神と成就者の意識が創られる。¹²

4 Japujī 35-36 (GS. p. 7). また giāna < SKt. jñāna である。

5 Harnam Singh (1957), *The Japji, translated into English and Explained*, New Delhi: S. Surinder Singh, p. 141. (閲覧 2019/09/20 <http://www.panjabdigilib.org/>)

6 giāna khaṇḍa mahi giānu paracaṇḍu || tithai nāda binoda koḍa anandu || (Japujī 36, GS. p. 7)

7 Ibid.

8 Śabadārath Srī Gurū Granth Sāhib Jī (1936-41) (text and commentary on the Ādi Granth), n.p., p.7. n.29. Teja Singh (1930), *The Japji* (English trans.), Amritsar: Khalsa College, pp. 13, 19 ('self-Exertion'). Sahib Singh (1962-4), *Srī Gurū Granth Sāhib Darpan*, vol.1, p.124. (閲覧 2019/10/30 <https://www.searchgurbani.com/sri-guru-granth-darpan/page/124/>)

9 Vir Singh, *Santhyā Srī Gurū Granth Sāhib* (7 vols.), Amritsar, 1958-62., Vol.1, p. 167. Macauliffe, M.A., *The Sikh Religion*, Oxford, 1909, Vol. 1, p. 216.

10 Harnam Singh, *The Japji*, Delhi, 1957, p.143. Gopal Singh, *Sri Guru Granth Sahib*, Delhi, 1962, p.11.

11 tithai ghāratī gharīai bahutu anūpu || tā kīā gala kathīā nā jāhi ||
jo ko kahai Pichai pachutāi || (Japujī 36, GS. p. 8-9.)

12 tithai gharīai surati mati mani bidhi || tithai gharīai surā sidhā kī sudhi || 36 ||

第三の語源解釈は面白いが、しかし、第一のものが最も可能性が高いと思われる。第一の解釈は、上記の二行詩の内容に合っており、グルー＝ナーナクが明らかに「努力」「精進」の意味で他の文脈において *sarama* を使っていることにも合っている。

心を鋤に、善行を農業に、努力を水に、身体を畑に [せよ]。¹³

鋤を繰る農夫の姿のほうが、*sarama* を「努力」「精進」と翻訳すればより良く一致する。「謙遜」「従順」の意味のほうは、以下の *garībī* の意味に包含される。

「カラム・カンド」(*karama khaṇḍa*) が第四の階梯¹⁴であり、主要な二様の解釈がある。第一は多数派の意見で、*karam* はアラビア語起源で *karam* の派生語で「恩寵」の意味であり、したがって第四段階は「恩寵の階梯」となる¹⁵。

第二のごく少数派の解釈は、*karama* を Skt. *karma* の派生形とみなし、「行為の階梯」と訳している¹⁶。アラビア語起源説のほうが確かに多くの支持を得ているが、この説に対して重大な反対意見が提示されている。「恩寵」の観念は、グルー＝ナーナクの思想の中で確かに根本的な重要性をもっているが、恩寵の受用が信者の神との合一への段階のなかでとても後に現れることが、グルー＝ナーナクの作品の中で明示されていないのである。それとは反対に、恩寵はすべての過程にわたるものであり、恩寵に関して特別に重要な段階があるとするならば、それは最初の過程なのである。しかしながらサンスクリット語起源説は、同様に強い反論に面しているのである。*Sarama Khaṇḍa* が「努力の階梯」と見做され、*karama khaṇḍa* が「行為の階梯」と見做されるべきならば、両者の違いはほとんどないということになる。

第三の可能性は、*karama* がサンスクリット語の語彙であり、通常の意味を持っているというものである。この場合、帰依者 (*bhagata*) が *nāma simarana* (名号の憶念) を真摯に実践して得た行為 (*karma*) の功德を獲得し始めるのが第四の階梯である、という意味になろう。こう考えたほうが第四の階梯について述べられていることと整合性をもつと思われる。なぜならば成就が強調されており、成就の側面は帰依者が誤謬と輪廻転生を超越すると言われることである。したがって、適切な訳は「成就の階梯」と思われる。

「サッチ・カンド」(*Saca Khaṇḍa*) が第五段階であり「真実の階梯」と訳せる。この段

13 *manu hālī kirasānī karaṇī saramu pānī tanu khetu ||* (Sorāṭhi 2, GS. p.595)

14 *Japujī* 37 (GS. p.8)

15 Vir Singh, op. cit. Vol.1, p.167. Kahn Singh, *Mahān Kos*, p.227. Sahib Singh, op. cit., Vol.1, p. 125. Sher Singh Gyani, *Guramati Daraśana*, Amritsar, 1962, p. 329. Gopal Singh, op. cit., 11. S. S. Kohli, *Guru Granth Sahib: An Analytical Study*, Amritsar, 1992, p.367. *Srī Gurū Grantha Sahiba Kośa*, p.352.

16 Macauliffe, op.cit. Vol.1, p. 216. Trumpp. op. cit. p. 12. Teja Sogh, *The Japji*, pp. 14, 40. Khushwant Singh, *Japji: The Immortal Prayer-Chant*: New Delhi: Abhinav Prakashan, 1987, p. 24.

階に「無形相の一者」が住している。まさにここで帰依者は一者に合一し、それは無限を表す言葉によってのみ記述可能なのである¹⁷。

人が語ろうとも、際限なし、際限なし。

そこに世界、宇宙が形相〔をなす〕。

これが真実在の探求の頂点である。なぜならば、神の教令 (hukama) との完璧で絶対的な一致があるのが、まさにここなのである。

教令があるごとに、そのごとに行為〔がある〕。¹⁸

しかし、体験のなかでこそ知り得る、という条件がある。

ナーナク〔曰く〕、〔それを〕語るは、鋼鉄の如く硬い。¹⁹

2. 至高なる者

「サチ・カンド」が人間存在の究極的な目標であり、人間の神への階梯の極地である。グルー＝ナーナクのこの至高なる状態に対する言及は、次の三つの事柄を明らかにしている。第一に、それは個々の心 (mana < Skt. manas) と神である最高我との合一として考えられるべきものである。第二に、この合一は、苦を伴う輪廻転生の永遠の止滅を意味し、その代わりに永遠の不変の寂靜を意味する²⁰。そして第三は、この段階の本性は表現を超えている、ということである。それは不十分な象徴や最大の一般化によっても決して表現できない。その本質は、合一の現証によってのみ認識できるのである。

グルー＝ナーナクが究極的な実体験の本性を表現するのに用いていた特徴的な語彙は、動詞の samāṇā あるいは samāuṇā である。それは、神の遍在性の文脈の中で「満たす」あるいは「浸透する」の意味で使われてもいるが、ここはむしろ「融合する」あるいは「混合する」の意味である。saci (真実在に) samāuṇā, śabadī (ことばに) samāuṇā, sahabi (生得のものに) samāuṇā, avigati (不可知なるものに) samāuṇā という語句は、グルー＝ナーナクが合一の体験を表現しようとした例である。それは、また、個我の光が神の光明の中に

17 je ko kathai ta anta na anta || tithai loa loa ākāra || (Japuṅī 37, GS. p. 8.)

18 jiva jiva hukamu tivai tiva kāra || (Japuṅī 37, GS. p. 8.)

19 nānaka kathanā karaṇā sāru || (Japuṅī 37, GS. p. 8.)

20 Cf. Gauṛī 20, GS. p. 154; Āsā Aṣṭa. 7 (4), GS. p. 414; Āsā Paṭṭī Likhi (29), GS. p. 434; Sūhī Aṣṭa. 2 (1), GS. p. 715; Sūhī Chanta.5 (3), p. 766; Bilāvalu Aṣṭa. 2 (8), GS. p. 832; Mārū Solahā 20 (4), GS. p. 1040; Sāraṅga 4, GS. p. 1197.

混合すること (jotī joti samāuṇa)²¹、個我の一滴が大洋に合流すること²²、すなわち個我アートマンが最高我 Paramātman に融合することである。

〔神が〕慈眼を向ければ、〔神を〕憶念でき、アートマンが融けて〔神に〕帰入する。アートマンが最高我と一つとなれば、内部の二元性は内部で失せる。²³

これが、第四の段階 (cauṭhā pada) すなわち三種の構成要素 (物質世界)²⁴ を超越した究極的な段階 (turīya pada, turīya avasthā²⁵, parama pada²⁶)、であり、不死なる境地 (amarā pada)²⁷ すなわち無常なるものと人間の表現能力すべてを超えた至高の歓喜の境地なのである。

グルー＝ナーナクの作品全体のなかで、ナート派およびナート派の背景をなす仏教タントラとの直接的な関連は、語彙の範囲を除けば、ないといえる。グルー＝ナーナクが、この第四の境地の実体験の何某かの意味を伝えようとして使用している術語の中で、最もふつうに使っているのが「サハジ」(sahaja) であり、「第十門」(dasama duāra) を超えた言表不可能な光明のことである²⁸。グルー＝ナーナクの「サハジ」とナート派の「サハジ」を区別することは困難である。なぜならば、両方とも、その言葉が表す状態を経験していない我々の理解を超えているに違いないからである²⁹。グルー＝ナーナクはナート派の方法にたいして異議を強調しているが³⁰、両者とも、「サハジ」と呼ぶ究極の状態について同様の主張している。両者にとって、それは絶対的な均衡状態と絶対的な寂靜のなかで開示される至高の内容を持っているからであり、それは輪廻転生を超えた状態であるからである。ナート派は、この経験を彼らなりの方法で、ある程度正確に表現しようと努めたのではあるが、その記述は否定的な表現であるか、あるいは論理的に解決できないパラドックスであって、それらが生み出す神秘体験の外側では何ら実質的な意味をなさないものである。さらに、このような表現の最も典型的なもので「奏でられざる音」(anahada sabada < Skt.anāhata śabda) という言葉があり、グルー＝ナーナクはこの言葉を自分が究極の状態を経験したときの状態を表現するシンボルの一つとして用いているのである³¹。

21 Tukhārī chanta.,5 (3), GS. p. 1112.

22 Sirī Rāgu 22, GS. p. 22.

23 nadari kare tā simariā jāi || ātamā dravai rahai liva lāi ||
ātamā parātamā eko karai || antara kī dubidhā antari marai || (Dhanāsarī 4, GS. p. 66.)

24 Dhanāsarī Aṣṭa. 1 (7), GS. p. 686; Bilāvalu Thitī (18), GS. p. 840.

25 Gauṛī 12, GS. p. 154; Āsā 22, GS. p. 356.

26 Siddha Goṣṭī (24), GS. p. 940; Prabhāṭī 14, GS. p. 1331.

27 Tilaṅga 1, GS. p. 725.

28 Gauṛī Aṣṭa. 15 (2), GS. p. 222; Rāmākṣī Aṣṭa. 3, GS. pp.903-4. グルー＝ナーナクの「第十門」の用法については、Mārū Solahe 13 (1), 16 (2), 19 (4), 20 (2) GS. pp. 1033-40.

29 M. Eliade, *Yoga: Immortality and Freedom*, Princeton University Press, 1968, p. 268.

30 Siddha Goṣṭī, GS. pp.938-46.

31 Sirī Rāgu 18, GS. p. 21; Āsā Chanta. 2 (1), GS. p. 436.

ナート派の表現との比較は、実体験がなければほとんど役立たないことが分かるが、スーフイーの源泉から探し出せる事柄についても、まったく同じことである。スーフイーとの比較とから生じる問題は、スーフイーのバカー (baqā' 神との神秘的合一後の持続状態) の観念に対応するようなシンボルをグルー＝ナーナクが提示しているかどうかということである。この疑問は最終的には答えられないが、この段階でいえることは、スーフイーの直接的な影響を示すいかなる証拠もない、ということである。大海すなわち神のなかを泳ぐ魚すなわち靈魂というイメージは、上記の持続状態を示唆しているように思えるが³²、しかし、水に水が流入するということや光が光に融合するという通常のイメージは完全な融解の観念を指している。この疑問に対するグルー＝ナーナクの応答は、その解答は個人の体験の中においてのみ見つかるものである、ということであろう。

ここで、われわれは言表不可能な事柄に直面し、理解の一部のみを与える記述に満足しなければならない。神秘的合一の状態は、これまで何度も見てきたように、輪廻転生を超えたものである。

〔神の〕名号を憶念すれば安楽を得る、グル(導師)の教えに従えば死神に捉えられず。死神は生死〔から我々〕を離さず、〔神の〕名号なくて〔我々は〕苦悩する。³³

〔神と〕合一すれば、〔決して神から〕離れることはない、〔神と〕合一すれば。³⁴

それは、最高の驚愕 (visamāda < Skt. vismaya) の境地である。

その〔神の〕際限を知らず誰も。完璧なグルから知識が生じる。

ナーナク〔曰く〕、真実在に沈潜して驚愕する者は、驚愕して〔神の〕功徳を讃える。³⁵

そして、それが安穩、歓喜の極致、完全な寂靜の境地そして人間の言表を超えた状態なのである。

身体は〔神の〕宮殿、寺院、ハリ(神)の家、その中に〔神は〕無限の光明を注いだ。

ナーナク〔曰く〕、〔人は〕グルのことばによって宮殿に呼ばれれば、ハリに遇い合一す。³⁶

32 Sirī Rāgu 31, GS. p. 25.

33 nāmu dhiāvai tā sukhu pāvai guramati kālu na grāsai ||
jamaṇu maraṇu kālu nahī choṛai viṇu nāvai santāpī || (Tikhārī Chanta. 2 (3), GS. p. 1110.)

34 miliā hoi na vīchurāi je miliā hoi || (Sūhī 4, GS. p. 729)

35 tā kā antu na jāṇai koī || pūre gura te sojhī hoī ||
nānaka saci rate bisamādī bisama bhae guṇa gāidā || (Mārū Solahā 15 (16), GS. p. 1036.)

36 kāiā mahalu mandaru gharu hari kā tisu mahi rākhī joti apāra ||
nānaka guramukhi mahali bulāīai hari mele melañahāra || (Malāra 5, GS. p. 1256.)

【参考文献】

- 拙稿 (2006) 「第2部 スイク教祖ナーナクの思想」『インド中世民衆思想の研究』、ノンブル社、pp.459-490.
- (2013) 「スイク教研究一序」『東洋学論叢』第38号、117-136頁
- (2014) 「スイク教聖典編纂者グル＝アルジャンの生涯—歴史と伝承のなかで」『東洋思想文化』、第1号、pp.86-103.
- (2015a) 「スイク教祖ナーナクの神観念」『東洋文化思想』第2号 pp.(20)-(43).
- (2015b) 「インド中世民衆思想における死生観—スイク教祖ナーナクの場合—」『東洋学研究』第52号、pp.247-259.
- (2018) 「グルー＝ナーナクの思想における『神の自己顕現』の観念」『東洋学研究』第55号、pp.79-97.
- (2019) 「グルー＝ナーナクの実践論」『東洋学研究』第56号、pp.67-84.
- Cole, W. Owen & Piara Singh Sambhi (1978) *The Sikhs: Their Religious Beliefs and Practices*, London: Routledge & Kegan Paul. (溝上富夫訳『シク教—歴史と教義』筑摩書房、1986年)
- do. (1990) *A Popular Dictionary of Sikhism*, London: Curzon Press.
- Callewaert, Vinand, M. (1996) *Gurū Granth Sāhib with Complete Index*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- この他、Shiromani Gurdwara Parbandhak Committee 刊行のグルムキー文字版、デーヴァナーガリー文字版、および <http://www.gurbanifiles.org/> 上のテキストと辞典。
- Dasgupta, S. (1932), *A History of Indian Philosophy*, Delhi: Motilal Banarsidass, Vol. 2.
- Gopal Singh (1962), *Sri Guru Granth Sahib*, 4 vols, Delhi.
- Harnam Singh (1957), *The Japji, translated into English and Explained*, New Delhi: S. Surinder Singh.
- Kohli, S. S (1992), *Guru Granth Sahib: An Analytical Study*, Amritsar.
- Khushwant Singh (1987), *Japji: The Immortal Prayer-Chant*, New Delhi: Abhinav Prakashan.
- Macauliffe, M.A. (1909), *The Sikh Religion*, Oxford, Vol. 1.
- McLeod, W.H. (1990), *Textual Sources for the Study of Sikhism*, Chicago: University of Chicago Press.
- do. (1995) *Historical Dictionary of Sikhism*, London: Scarecrow Press, 1995.
- do. (2000) *Sikhs and Sikhism*, New Delhi: Oxford University Press, 2000.
- Sāhib Singh (1962), *Srī Srī Gurū Grantha Sāhiba Darpaṇa*, Paṭiyālā.
- Sher Singh Gyani (1962), *Guramati Daraśana*, Amritsar.
- Teja Singh (1930), *The Japji (English trans.)*, Amritsar: Khalsa College.
- Vir Singh (2007), *Santhā Srī Gurū Grantha Sāhiba Jī*, Vol.1, (1st ed. 1958), New Delhi.
- Wāsudev Laxmaṇ Śāstrī Paṇṣīkar ed. (1937), *The Yogavāsīṣṭha of Vālmīki*, Part.2, Bombay: Nirṇaya-sāgar Press.

キーワード：インド、スイク教、『グルー・グラント・サーヒブ』、グルー＝ナーナク、
実践論